

炳靈寺へ

— 黄河上流の船の旅 —

窪田哲三郎

去年の夏、私たちは機会を得て、中国奥地を敦煌まで旅することができた。いわゆるシルクロードの入口付近をのぞいてきたわけである。私たちとは、同志社女子中高の川島保（体育）、星野紅（理科）、松本健二（国語）と筆者（社会）の四名の教員と東京から参加した卒業生の郷司幸子さん、それに近畿ツーリストの村田さんの計六名。いずれも気心の知れあった小人数のグループであったから、のんびりと、しかも充実した旅行を楽しむことができた。

海外旅行の多くの場合、最初に訪れる土地の印象が一段と鮮明なものである。私たちが最初に宿泊したのは蘭州であり、滞在

の第一日を炳靈寺までの往復コースの見学にあてた。

その日（八月一三日）、空は朝から突抜けるように青く澄んでいた。内陸の半乾燥地域にあるとはいえ、八月はこの地方の雨期にあたる。好天に恵まれたことは、何よりの幸せであった。専用のマイクロバスでホテルを出発すると、すぐにガイドの孔さんが、窓外の景色を追いながら蘭州市と甘肅省の地理や歴史を一生けんめい、克明に説明し始めた。

「何デスカー」と、かん高い声で必ず切出す話し方がおかしいと、一緒に笑っていたが、なかなかどうして立派な日本語だ。聞

けばラジオの日本語講座により独学で勉強したとのこと。後から見聞するのだが、若い人たちの日本語熱は実にさかんなものである。西安市の夕暮どき、ホテル（西安大夏）付近を散歩していると、次から次へと青年たちが、巧みな日本語で親しみをこめて話しかけて来る。いずれもラジオで勉強しているとのことだった。

車はやがて、蘭州の工業を代表する石油化学コンビナートを左手に見送ると、黄土によって厚く被われた丘陵地帯にさしかかる。台地の上に点在する土の農家や、そのまわりにゆったりと拡がる段畑にみとれていくうちに、およそ二時間程で劉家峽ダムに着いた。黄河本流を堰き止める高さ一四七米、長さ二一五米の巨大なダムである。その地下発電所は出力一二三万キロワット、中国最大の規模を誇り、蘭州や、遠く西安の電力需要に役立っている。めざす炳靈寺はここからさらにダム湖上を六五軒、三時間の船の旅。

炳靈寺は最近のシルクロード・ブームによって、訪れる日本人観光客のにわかが増えた黄河上流の一大石窟寺院である。ここ



黄河上流の山水美—炳靈寺は近い—手前の舟は羊皮の筏

の石窟は西秦から隋・唐を経て清代に至る各時代に開かれた。そのシンボルともいえる巨大な坐仏像は高さ二七米、奈良の大仏よりはるかに大きい。古代のシルクロードはこの付近で黄河を渡っていたといわれ、道行く旅人は、絶壁に刻まれた壮大な磨崖仏や数百の石仏に、道中の安全無事を祈った。

たことであろう。炳靈寺は今のところ陸路から訪ねるルートはなく、黄河の増水期に船で渡れる八〜十月しか探勝の機会が無い。私たちは敦煌莫高窟以上の期待をもって、今度の旅行にこのコースを組込んだのであった。

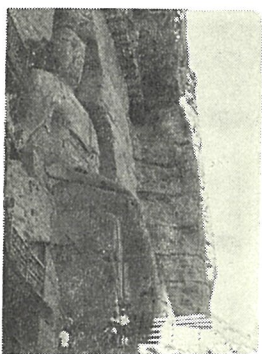
堰堤を下り、瀟洒な遊覧船に乗りかえる。驚いたことに、ここでは蘭州でみたあの褐色に濁った黄河の濁流が青く澄んでみえるではないか。人造湖になっているとはいえ、まさに黄河ならぬ青河である。「百年河清を俟つ」という中国の古い言葉が思い出された。「流れの止ったダム湖では土砂が沈むし、それに空の青さを反映して、このように青く見えるのよ、きつと。」星野先生はきつぱりその理由を解釈したが、次の疑問が湧いてきたのかちよつと不安な表情になる。ならば年々湖底に堆積する土砂は莫大な量に達し、ダムはまもなく埋没するではないか。NHKの本では濁りのきつい支流の洮河をよそに導いているから、としているが、実のところよく判らない。上流の炳靈寺付近の黄河本流は確実に黄濁した流れであるからだ。



黄土台地の農村風景

通航することしばらくにして、その洮河の谷が左手に現われてきた。

訓点学の研究者で中国事情に詳しい松本先生の説明では、宋代の幻の名硯として知られる洮硯の原石は、この谷から産出したそうだ。そういえば昨夜泊った蘭州大飯店のみやげもの売場に、薄緑色の地に黒っぽ



大仏の奈良、廬山寺靈燭
大きい

い縞模様のはいったきれいな硯が並んでいた。昔の洮硯とは違った石らしいが、新端溪や、あるいは酒泉の夜光杯などのように、伝統的工芸品として新しく生産を復活しているのだろうか。

買物するときにはね、と彼はまた面白いことを教えてくれる。「値段を聞くときは、語尾を上げるようにして、早口に、同志社幼稚園、と云うたらええ、How much?と同じ意味やし……。」ドウシシャヨウチエンIIトーシヤオチエン(多少銭)は、それから敦煌でも西安、上海でも、もっとも役に立つ言葉となった。

舟の進む兩岸には黄土層で被われた丘陵地帯が延々と連っている。地図で確かめると、ここは西安付近から西へ拡がっている

あの広大な黄土高原地帯の西端付近に当たっている。乾燥地の帯として、地表の傾斜地の大部分は、草木も付かぬむき出しの荒々しい大地である。しかし湖岸のところどころに開けた小平地や、河岸段丘上の扇状地には、そこだけが水利の便があるのだろうか。ポプラや柳の茂る小さなオアシスになっているのを望見することができる。そこには日干煉瓦で造った素朴な農家のまわりに耕地が開け、草地では羊の群れが遊んでいる。「南船北馬」という古い言葉があるが、これは北馬ならぬ北船の情景であった。黄河総合開発という新しい技術が新しい景観を生んだのである。

遊覧船の上甲板に座り込み、夏八月の陽光をいっぱい浴びているのに、ちっとも暑さを感じない。携行した温度計・湿度計をみる。気温二九℃、湿度三八%、頬を撫でる風はむしろさわやかでさえあった。川島先生は手帖片手に黙念と目を閉じている。句作にふけているのだろうか。郷司さんは一人旅の若いアメリカ人の男性と話し込んでいる。仏教美術の研究者で敦煌を回ってきたそうだ。モンシロチョウがひらひら舞

いながら静かな湖面を渡っている。後から後から現われては、空と湖の青みの中へ溶けるように消えていく。

やがて兩岸が迫り、奇峰の林立する素晴らしい風景が現われてきた。水はいつの間にか黄色く濁って、早い流れに変っている。名物の羊の皮袋で作った筏ボートが一艘、流れに乗って近よってきた。

目ざす炳靈寺石窟は、その向うの岩峰の裾をまわった奥にある。

(女子中・高教諭)



古地図逍遙

湯口誠一

書籍の中における「地図」の所遇は、一般に見て、あまり高い位置にはないようである。旅行や山歩きの時など、思い出したように開かれはするが、用が達せられるやボンと本棚の一隅へ投げ込まれて、再びもとの永い眠りに入るのが通例のようだ。他の図書が、精神の糧と重んじられ学芸の功と見なされているのに比べると、地図は一つの情報源としての地位しか与えられていないのは気の毒だ。

一 国語教師に過ぎぬ私に、古代世界図に表わされた世界像や、現代地図学の志向するものなどについての見識は皆無である。私はただ、生まれ育ち住みついて、日ごろ

踏み歩きながら、しかも今なお歩ききれぬ京の町の図にのみとらわれており、いつか幻を追うように、江戸期にさかのぼって、その町絵図に心を遊ばせているに過ぎない。

京都の古地図も、他の都市と同様、手書き図と木版図とに二大別できる。前者は幕府お抱えの近畿大工頭中井家の実測製図したものが主流であり、寛永十四年作「洛中繪図」（現、宮内庁蔵）は、お土居の内部のみを描いたものだが、縮尺一六二五分の一の大きなもので、爾後中井の調製する京都図の基図となったようだ。年代が下がるに従い、お土居の外の村落・道路なども次第に書き込んで、元禄十四年作の図（現、

三田図書館蔵）に及んで、当時の概念での洛中洛外を精細に描き上げた図となった。他方、木版図は、版元不明ながら寛永にはり洛中市街だけの図が刊行され、徐々に洛外域を包含していつて、京絵図としての面目を備えてゆき、貞享三年林吉永という地図屋が五色筆彩の觀光大図を公刊して人氣を博するに至った。木版図は幕末まで二百種を超え、時好に応じて大小多種多様な図が生まれ出ており、幕末期の図などは、京都を舞台とした戦国群雄図の観がある。

初期の手書き図と木版図とを見比べるると、町名の異同が多いのに気付く。寛永期千三百余町の約二割方にそれが見出されるのである。民間出版業者の手になる木版図の町名は、とりもなおさず俚称・俗称、いわば民称であり、中井の手書き図のそれは、行政の側の称呼、いわば官称と見るべきであろう。民称、官称、それぞれに由来するところがあり、どちらが由緒正しいかは一概に定めかねるけれど、木版図を年代を追って見てゆくと、民称のほとんどは、遅速まちまちながら、宝暦のころまでに官称に取って代られているのがわかる。官称

には幕府の姿勢が当然ながら表に見えていて、キリスト教に関わる民称「だいうす町」(デウスの町の謂)——若宮通高辻下ルと岩上通四条下ルの二か町——には、寛永の当初から「菊屋町」「佐竹町」といった名を与えている。また、元禄の綱吉の時には、娘鶴姫の文字を民間で用いることを禁じて、従来「鶴屋町」と称した町々(當時、市中に六か町あった)をすべて新しい名に変更させてしまったりしている。現在、京都に「亀屋町」は十一もあるのに「鶴屋町」が一つもないのは綱吉のせいであるわけだ。

先に述べた中井の「洛中絵図」で「二条城」の姿を見ると、全然歪めて描いてないが、この城は京都人なら誰も知るとおり、全体に少し右へ振っているのである。その角度は三度強。まことに中途半端な歪み方ではないか。——方位正しき碁盤の目のような京の町中において、ちょっと斜に構えた気取りなのか。いや、これは作事に際して、方位の基準に磁石を用いたのだ。当時の測量者はまだ磁石の「偏角」の知識を持っていなかった。しかも彼らにとっては、

天文によるよりも、ヨーロッパの航海者の用いる磁石による方が、新しい理論であり技術だった。城の東濠と堀川との間隔を、北の方で二十四間、南の方で三十間半と明らかに記しながら、彼らは地図を描くに当たって、二条城を決して歪めて書きはしなかった。——こんなことを、以前ある本に書いた。いわば「直観」の仮説で、賛否の反応もなく過ぎてきた。しかしそのあとで、「聚楽第跡発掘調査概要」(平安宮跡発掘調査団・昭和五十一年)を見たら、二条城より十六年前に着工した「聚楽第」もほぼ同じぐらいの角度で、同じように頭を東へ傾けていたらしいと記述していた。このころの測量記録が今日残っているかどうか知らないが、古地図を眺めているうちに、こんな考えが浮かんだりするのも一つの楽しみである。

楽しみと言えば、古地図の楽しみの一つは、謎解きにある。刊記の無い木版図の、図形や文字をあれこれ検討してゆくうちに、ふとした手がかりからその年代が推定できた時は、一服の煙草の味もちがうのである。幕府役人の名前、町名、禁裏の

形、社寺の位置、新地の開け具合……どこに鍵があるかわからないわけだ。私は天眼鏡を片手に、しばしばタイムトラベルと推理の世界にひたり込む。

もとより、私は古地図のコレクターではない。私の眺める古地図はすべてが写真か複製である。初めのうちは、所蔵の図書館へ出向いて、撮影許可を貰って、自分のカメラで分割で撮った。京大の「寛永後万治前京都全図」は六・三六メートルに二・八メートルの大きな手書き図だが、三百枚ほどに分けて撮った。今ではすでに立派な写真複製(七十枚分割)が出ているが、私にとっては自分の写した拙いものの方が、原図を彷彿させるのである。

おそらく、あはたもえくぼ、なのだろうけれど、古地図の持つ稚拙さ、曖昧さ、場合によっては不合理ささえが、今の私には愛すべきものなのである。遠い祖先が、こんなものを手にして、時には迷いながら、寺へ詣り、人の家を訪ね、名所の花を探したのであると思うにつけても、他の書物にないぬくもりのようなものを感じるからだろう。(高等学校教諭)